

武藏野日曜講筵

安息日

——マルコ伝第2章23節～3章6節——

小池辰雄
1977年11月13日

エホバの安息 貴い出し ヨベルの年 安息日の主 偽善者 絶対なるものは神のもの キリストの中に安らう

【マルコ2・23～3・6】

²³イエス安息日に麦畠をとおり給いしに、弟子たち歩みつつ穂を摘み始めたれば、²⁴パリサイ人、イエスに言う『視よ、彼らは何ゆえ安息日に為まじき事をするか』²⁵答え給う『ダビデその伴える人々と共に乏しくして飢えしき為しし事を未だ読まぬか。²⁶即ち大祭司アビアタルの時、ダビデ神の家に入りて、祭司のほかは食うまじき供のパンを取りて食い、おのれと偕なる者にも与えたり』²⁷また言いたもう『安息日は人のために設けられて、人は安息日のために設けられず。²⁸然れば人の子は安息日にも主たるなり』

1また会堂に入り給いしに、片手なえたる人あり。²人々イエスを訴えんと思いて、安息日にかの人を医すや否やと窺う。³イエス手なえたる人に『中に立て』といい、⁴また人々に言いたもう『安息日に善をなすと惡をなすと、生命を救うと殺すと、いずれかよき』彼ら默然たり。⁵イエスその心の頑固なるを憂いて、怒り見回して、手なえたる人に『手を伸べよ』と言ひ給う。かれ手を伸べたれば癒ゆ。⁶パリサイ人いでて、直ちにヘロデ党の人とともに、如何にしてかイエスを止ぼさんと議る。

●エホバの安息

²³イエス安息日に麦畠をとおり給いしに、弟子たち歩みつつ穂を摘み始めたれば、²⁴他人のところの畠の穂を摘んでいるわけですね。

²⁵パリサイ人、イエスに言う『視よ、彼らは何ゆえ安息日に為まじき事をするか』

パリサイ人の問らしいわけですが、そうすると、キリストが、

答え給う『ダビデその伴える人々と共に乏しくして飢えしき事をす



未だ読まぬか。²⁶即ち大祭司アビアタルの時、ダビデ 神の家に入りて、祭司のほかは食うまじき供のパンを取りて食い、おのれと偕なる者にも与えたり』と。そうあるじやないかと。

²⁷また言いたもう『安息日は人のために設けられて、人は安息日のために設けられず。²⁸然れば人の子は安息日にも主たるなり』こんなことを仰るものだから、反ユダヤ教ということで、睨まれたわけです。

そこで、旧約における

「あんそくじつ安息日」

を多少見てみなくてはならないんですが、「安息」という言葉はヘブライ語では「シャーバツト」といいます。「安らう」という字です。これは動詞です。これが名詞になつて「安息日」ということになると、

「シャバート」

となる。「安息日」のことは、ご承知のとおり、申命記の5章、出エジプト記20章に書いてある。まだその他にたくさんあります。

「⁸安息日を憶えてこれを聖潔すべし。⁹六日の間勞きて汝の一切の業を為すべし。¹⁰七日は汝の神エホバの安息なれば何の業務をも為すべからず」（出エジプト20・8～10）

こここの出エジプト記のところは「P」の記事ですね。ちゃんと祭司的な角度から言われています。

「汝も汝の息子息女も汝の僕婢しもべしもめも汝の家畜しょくも汝の門の中におる他國よそぐにの人も然り。¹¹其はエホバ六日の中に天と地と海とそれらの中の一切の物を作りて第七日に息みたればなり。是をもてエホバ安息日を祝いて聖日としたもう」（出エジプト20・10～11）

まあ、非常にはつきりと書いてある。天地創造の神話、創世記1章。これは「P」によつている「祭司典」です。

六日でもつて天地を創造し、完成する。しかし、天地創造の神話といいましても、正に然らんと思われる順序で神さまの創造ができるることは大したもんですよ。神さまの一日は何年だか分からない。要するに、一日、二日、三日と数えた。ちょうど七日目——ヘブライ語で「七」という字は

「シェバッハ」

という。ちょっと似ている——しかし、この「七」という字からきたのではなくて、偶然に「七」という字と「安息」という字が語呂合わせみたいに似ているわけです。



● 賦い出し
レビ記23章1節、

「¹エホバ、モーセに告げて言いたまわく、²イスラエルの子孫につげて之に
言え、汝らが宣告ふれて聖会となすべし。エホバの節期せつきは是のごとし我が節期はす
なわちは是なり。³六日の間業務わざをなすべし、第七日は休むべき安息日にして
聖会なり。汝ら何の業わざをもなすべからず。是は汝らがその一切の住所すみかにおいて
守るべきエホバの安息日なり」（レビ23・1～3）

とある。また、レビ記23章32節、

「³²是は汝らの休むべき安息日なり、汝らその身をなやますべし、またその月
の九日の晩すなわちその晩より翌晩まで汝等その安息をまもるべし」（レビ記
23・32）

これは「贖罪の日」のことから書いてあつたな。

「七月十日は贖罪あがないの日にして汝らにおいて聖会たり」（レビ23・27）

「贖罪」

という言葉は歴史的にいうと、

「出エジプト」

からです。イスラエルの人たちがエジプトでもつて半奴隸状態で苦しんでいた。それから
救い出したことを、

「贖い出す」

と言つてゐるんです。その時に、いわゆる

「過越」

のことがあつたでしょ。

「イスラエルの人たちは門の所に、羊をほふつてその血を塗つておけ。そうす
れば初子ういごを殺さないで過ぎ越すぞ。その前を過ぎ越すぞ」

と、妙なことが書いてあります。

「エジプトのやつは、そういうことをしないものだから殺されてしまった。お前た
ちはそれで羊の血によつて救いを得た」

と。

「贖罪の血」

というのは、もともとそこからくるんです。出エジプト自体が、イスラエルが贖い出された。
そういうところから、困難からの救い出しがもともと「贖い」です。それから、バビロニ
アから出る時は、今度は罪からの贖いになる。

不信の罪からの贖い出しが「出バビロニア」であつて、困難からの贖い出しが「出エジプト」
である。この大きな歴史的な二つの事実。これが「贖い」という言葉の事実的背景なんです。



ですから、安息は、

「神さまが業を休めた」

という意味と、

「イスラエルは贖い出されたんだから、それを憶えて安め、なやますな」

と、そういう二つの意味が歴史的に、安息の意味にはあるんです。

●ヨベルの年

レビ記25章1節から、

「¹エホバ、シナイ山にてモーセに告げて言いたまわく

出エジプトしてからシナイ半島に行きましたね、

²イスラエルの子孫につげて之に言うべし、我が汝らに与うる地に汝ら至らん時はその地にもエホバにむかいて安息を守らしむべし。³六年のあいだ汝その田野に種播きまた六年のあいだ汝その菓園の物を剪伐てその果をあつむべし。⁴然ど第七年には地に安息をなさしむべし。是エホバにむかいてする安息なり。汝その田野に種播くべからず。またその菓園の物を剪伐むべからず」（レビ25・1～4）

だから、安息は

「七日目と七年目」

という二つの意味をもつています。これは非常に神の業に関係している。人間の労働はそういう意味において、安息日は、ただくたびれたから休むというのではなくて、祝福されるわけです。

「神さまを憶えて祝福にあずかる」

というのがこの安息の本来の意味です。それが派生した意味では、七日目くらいがちょうど休むのにいいという近代的な人間本位の考え方が出できますけれども。しかし、その元は神の業に基づいた。だから、人間の労働にもそれが派生してきて、祝福されるということです。

⁸汝安息の年を七次かぞうべし是すなわち七年を七回かぞうるなり。安息の年七次の間はすなわち四十九年なり。⁹七月の十日になんじ喇叭の声を鳴りわたらしむべし 即ち贖罪の日になんじら国の中にあまねく喇叭を吹きならさしめ、¹⁰かくしてその第五十年を聖め國中の一切の人民に自由を宣しめすべし。この年はなんじらにはヨベルの年なり。」（レビ25・8～10）

これは大事な言葉ですよ、

「ヨベル」

というのは「歡喜、喜び」という字です。



こういう「七日目と七年目」、それが本来神さまの安息から発している。また、出エジプトという救いから発しているということが、この安息の祝福の意味なんです。だから、神の中に安らう。ただボヤツと安らうのではないんです、安息は。神に祝福されるんだから、神の中に安らう。

「私は神の中に安らう」

ということ。これは今度は福音的になる。註解書で私はそういうように読んだことはない。今、私が言うだけのはなしです。「神の中に安らう」ことが本当の安息です。

レビ記だの出エジプト記にはよく安息のことが出てますから。

● 安息日の主

マルコ伝に戻ります。

²⁵ 答え給う『ダビデその伴える人々と共に乏しくして飢えしとき為^なし事を未だ読まぬか。²⁶ 即ち大祭司アビアタルの時、ダビデ神の家に入りて、祭司のほかは食うまじき供^{くら}のパンを取りて食い、おのれと偕なる者にも与えたり』

ダビデがこんなことをしたと。これは一体どこに書いてあるかというと、サムエル前書の21章6節、

「⁶ 祭司かれに聖きパンを与えたり
ダビデにね、

そはかしこに供^{そなえ}前のパンの外はパンなかりければなり。即ちそのパンは下る日に熱きパンをささげんとて之をエホバのまえより取りされるなり。」（サムエル前書21・6）

そういう祭司のパンを与えたとあるじゃないかと。だから、麦畑で取つたつて悪くはないんだと、大分乱暴な言い方です。キリストは相当、共有的な気持をもつていらっしゃる。

「安息日は人のためなので、人が安息日のためにあるのではない」と。こちらも旧約における安息の本来の意味からちよつとはずれたようなことを言つておられる。しかし、それは文字づらの意味であつて、もう一つ奥はそうじやないけれども。だから、

「人の子即ちキリスト、私も安息日は主である。だから、人の子に限らない。キリスト者はみんな安息日の主だ」と。これはちょっと躊躇の言葉ですね。

● 偽善者

マルコ伝3章に入ります。

¹ また会堂に入り給いしに、片手なえたる人あり。² 人々イエスを訴えんと



思いて、安息日にかの人を医すや否やと窺う。

罵をかけるようなことを言うわけだ。「人々」といつたつて、パリサイ派のやつだ。

³イエス手なえたる人に『中に立て』といい、

彼らがどう思っているか、キリストは人の心の中が読めますから、いろんなことを言いたがるやつらの真ん中に立たせてしまつた。

⁴また人々に言いたもう『安息日に善をなすと惡をなすと、生命を救うと殺すと、いずれかよき』

今度は逆に、反問したわけだ。問い合わせた。ところが、パリサイ連中は答えられない。

彼ら默然^{もくねん}たり。

黙秘權を使つてしまつた。

⁵イエスその心の頑固なるを憂いて、怒り見回して、

キリストも憤然としてしまつたわけです。キリストはそういつた偽善者に対しても憤られる。躊躇したり転んだりして罪を犯す者をキリストは救おうとなさるけれども、己をよしとして言い張るような自己義認者に対しては、キリストは怒るんです。

だから、いわゆる学者・パリサイ人に対して、キリストは怒るんでも、

「^{わざわい}禍害なるかな、偽善なる学者、パリサイ人よ」

と鋭く言つておられるでしょ。

「偽善」とは、己を義^よしとすることがキリストにとつては偽善なんです。これは普通の概念よりももうひとつ強い。

「それでは困るではないか。正しいと思つてなぜ悪いか」

と普通は思うでしょ。正しいのは、その事柄が正しいので、自分が正しいのではない。人間そのものは、そう思う事態においてそれは正しいかも知れないけれども、どこまでも真理の前に平伏しの気持でないと自己主張になるから、キリストはこれを偽善と言われた。パウロがそうだつたんです。パウロはなるほど

「律法の義につきては責むべきところなし」

と、律法をちゃんと外側から守つて、また一生懸命守つていると思っていた。その義においては、自分は責むべきところなし。即ち、ユダヤ教において自分は熱心であつたと。主觀的に熱心なんですよ、正直。そうして、見たところ確かに立派なんです。道徳的、宗教的であるんです。けれども、そのように、そういう角度から自己を肯定していることがキリストにとつては「偽善」というんです。困つたね。

●絶対なるものは神のもの

だから、宗派根性は偽善だよ。相対主義の中ではダメなんです、この福音の世界は。それぞれの主義主張には眞理性がありますよ。けれども、それを主張して他を排斥するところ



ろが間違っている。その限りにおいては確かに正しいことはある。しかし、他の在り方もいろいろあり得る。絶対なんていうものはありはしない。問題はその中にある何が絶対か。絶対なるものは神のものですから、どれも。相対の姿において何か間違っていることがあれば、それは相対における相対的な間違いということはお互いに指摘することはできるでしょう。けれども、その間違いを絶対的な角度から間違いと言い切るようなことをするから、それはいかん。分かりますか。

我々は相対的な在り方の中にありながら、

「絶対的なものがそこににあるか」

ということ。その中に本当のものさえあれば、

「なるほどあそこには本ものがある。あの在り方はあんまり感心しないけれども結構でござります」

と。お互いに忍び、赦し、認めあう。

パウロはそのようにして、

「偽善なる学者、パリサイ人」

とキリストが言われるその偽善が分かつたわけです。だから、今まで自分が正しいと思つたことを

「塵芥ちりあくたの如く」

彼は棄てた。

「大間違いだつた。自己主張していたな、私は」と。

キリスト自身が己を善しとしなかつたではないですか。キリストは世界で第一人者です、道徳的に言おうが、宗教的に言おうが。それが

「神さまのほかに善いものはない」

と言つたではないですか、キリストが。キリストはいわゆる自己義認を徹底的にしなかつた。「神さまだけだ。100%は神に。自分はゼロだ」

と。これが偽善でないということです。そうすると、本当の義しきがそこに来るんです。神的な神の義が来る。人間の義ではない。これは普通の道徳の世界では、これが言えない。これが——ただ道徳の世界を棄てるんじゃない——本当に満たすんです。満たして、もうその世界にこだわることがないということです。

●キリストの中に安らぎ

⁵イエスその心の頑固なるを憂いて、怒り見回して、手なえたる人に『手を伸べよ』と言い給う。かれ手を伸べたれば癒ゆ。
「わが言は靈なり生命なり」



という。正にその通りです。キリストが安息日に生命を救う。これに気をつけてください。

4節、

⁴また人々に言いたもう『安息日に善をなすと惡をなすと、生命を救うと殺すと、いずれかよき』

善をなし、生命を救う。私たちはキリストという至高善、最高の善なるキリストを受けとる。また、生命なるキリストを受けとる。私たちが安息日を神の中に安ろうとは、このキリストの中に安らって、キリストという善の善なるもの、美の美なるもの、眞の眞なるもの——真・善・美だよ、キリストは。だから、私は無限無量と言ふんです——これを受けとる。

「我は道なり、生命なり、真理なり」

という。我々はキリストという真理、生命を受けとるんです。

我々はなぜ集会を守っているかというと、守らんがために守つてているのではない。安息日は、私たちは神さまの中に安らわざるを得ない。キリストの力に与からざるを得ない。だから、安息日に力を得るんです、我々は。六日間の原動力がこの七日目の安息日です。

ユダヤ人にとっては、金曜日の夕方から土曜日の夕方が安息日です。女の人は煮炊きもしない。電車も汽車も止まってしまう。今でも相変わらずそうだ。

キリストは金曜日に十字架にかかった。そして三日目、日曜日の朝、復活された。復活の力、靈的な力をもつてキリストが日曜日の朝に立ち上がった。そして、靈的な力で岩盤を蹴飛ばしてしまった。キリスト教徒にとっては、日曜日はもの凄いキリストの生命の現象している日、現れた日です。この日にキリストの中に入つて力を得ないで、何が日曜、何が安息日、何が聖書礼拝だということです。いいですね。

この日曜日の力、生命、これは知情意の一切に対しても力が入つてくる。キリストを頂いた私たちは、安息日によきことが自ずから成されていく。人に福音を伝えざるを得ない。そして、聖書を本当に身読すればするほど力が出てくる。だから、守らざるを得ない。一緒に礼拝せざるを得ない。その意味において私たちは、安息日というものを旧約の精神をもつと新約の角度から、キリストの角度からこれを満たしていく。だから楽しい。甦りの力を頂く日です。

